オープンキャンパス2003

過去最多の4112人が参加

東北学院大学を体感!!

夏休みを迎えた八月一日、東北学院大学の一足早い大学生を体感できる学校公開（オープンキャンパス）が、泉キャンパスと多賀城キャンパスを会場に行われた。

学校公開は受験希望の生徒や保護者を対象に、東北学院大学を「見て」「聞いて」「体験」を通して理解を深めることができるイベントとして今年で五回目を迎え、毎年前年を上回る大勢の参加者が訪れている。

当日は、県内外から大勢の参加者でにぎわい、両キャンパス合わせて約四千人の生徒やその保護者が訪れ、昨年の三千三百人を大幅に上回る過去最高の人出となった。

泉キャンパスでは文・経済・法・教養学部の学校公開が行われ、受付開始の午前九時には大勢の参加者が次々と集まり、昨年を大幅に上まわる三千五百人が訪れた。受付を終えた参加者は全体説明を受け、在学生によるキャンパス施設見学や、林伸太郎入試部長による入試説明会に参加し、平成十六年度の大学入試に関する詳細な解説を受けた。また、各学科・専攻ごとの説明会や各担当教員や在学生との面談コーナーも好評で、模擬授業や実験・実習にも黒山の人だかりができるなど、各所に趣向が凝らされ、泉キャンパスは一足早い大学生の雰囲気で終日にぎわった（**写真右上**）。

◇

一方、工学部のオープンキャンパスは、多賀城キャンパスで行われ、約六百人の参加者が集まった。

午前九時からの受け付けを前に、生徒や父母らが集まり、参加者は、学科毎の小グループに分かれて、在学生の案内により各研究室・実験室などを見学し、教員や学生から研究内容の説明を受け、実際に触れてみるなど、参加者は大学側の内面に触れ、工学部の教育や活動に関心を寄せた。また、各学科に関する相談や就職情報・奨学金等の相談コーナーも設けられ、参加者は充実したオープンキャンパスを体験した（**写真左**）。

なお、オープンキャンパスのお問い合わせは総務部調査企画課（☎022―264―6424）まで。

大学サマー・カレッジ

七月三十一日より八月二日二泊三日青根で実施しました。主題講演はいつものように倉松学長、特別講演は工学部長鹿又先生『東北学院黎明期における科学者たち』として、お話がありました。聖書講義は永井先生。

参加学生六人。それだけに今回は、学生、教員が一体となって会の運営にあたり、また、内容の面では発題と語り合いは、とてもよいものになったと参加者たちは評価していました。発題は、予定していた学生が、地震、就職面接のために急遽都合がつかなくなりましたが幸い、参加者の中にリタイアして今年三年に編入した先輩の「学生」が担当、その他礼拝なども予定学生が担当できないということもありましたが、そこは宗教部の運営です。内容的にもよい礼拝をすることができました。

それぞれの人生を、生きようと熱心で真摯な姿勢をもつ学生たちが、静かに語り、それを他の学生たちが敬意をもって聞いていました。

三年生にもなり、新一年生の時とは、その容貌もすっかり落ち着いているようにみえますが、内面的には、将来への希望より、むしろなにがしか不安を感じているような学生たちの姿には、教師たちはかつての自分たちのことを重ねあわせて、語り合いに参加しました。

だからこそ、プログラムの中での礼拝の時は、とても真剣に耳を傾けているのでしょう（講演の記録はチャペルニュースに掲載されます）。

開会礼拝では「なやみの日に我を呼べ」として西谷先生が、「ナンバーワンにならなくてもよい、もともと特別なオンリーワン」というスマップの歌を取り上げ、イエスさまの言葉に励まされ、支えられ、そして導かれて、自分自身の確信、確立をはかることと奨められましたし、閉会礼拝では「光の中へ歩もう」と題して雨貝は、神様の導きによって、一人ひとりが、人生の歩みを、その働きに応じて成し遂げようとすることであり、本当に人間らしい人間となることができるよう、一日一日を確かな者として生きていこうと奨めました。

プログラムの最後は、「反省会」となっていますが、むしろ、このサマーカレッジに参加して、一人ひとりが得たこと、与えられたことを語って、それらの恵を分かち合う会として、一人ひとりが感想を語りました。

今回は、当初、参加学生たちが少なかったことを懸念していましたが、むしろ、そのために参加した先生方の信仰的な態度や考え方に触れることができたという感想がありました。参加した教員たちも、日頃、聖書研究会などの折りにはわからなかった、学生たちの話を聞き、あらためて、学生時代の一日一日の大切さを覚えたとのことでした。

〈宗教部副部長　雨貝　行麿〉

大学

地区後援会を32会場で開催
保護者ら1400人が参加

東北学院大学の地区後援会が、八月二日から九月十三日までの間に、気仙沼地区を新たに加え、東北と北海道、新潟、関東、静岡の三十二地区で開催された。

後援会は家庭と大学の連携をより密接にすることを目的に、本学泉キャンパスで行われた五月の総会のあとに夏期休暇中に各地で地区後援会を実施して、学生の保護者と大学の教職員が直接交流できる場としている。今年も大学からは八十人の教職員が各地に赴き、参加した父母らは合計千四百人余となった。

秋田地区後援会は、八月三十日に秋田市内の秋田ビューホテルで開催され、保護者百余人が出席した（**写真**）。はじめに大塚浩司副学長が大学の近況報告等を含めたあいさつを述べ、続いて教務部、学生部、就職部からそれぞれ具体的な説明が行われた。

その後、各部別の個人面談に移り、学業成績や学生生活、就職問題などについて各担当者と保護者の間で熱心な懇談が行われた。

地域連携のひとつの試み

経済学科　地域産業政策講座

近年、大学では「産学協同」や「地域連携」などのタイトルの元にさまざまな取組みがなされている。その多くは大学から情報や知識を提供したり、施設等を活用したりすることであって、大学から外部に向かって何らかのものを提供するかたちになっている。となると、そのような取組みの中心は産業界や地域社会が必要としている技能や知識を蓄積している学部・学科になり、それ以外の学部・学科では公開講座や文化講演会の開催が主な取組みとなる。

大学と学外との結びつきとしては、近年活発になりつつあるインターンシップもあげることができる。これは学生が数日職場の体験をすることであるが、教育の一部とは言え参加できる学生は、実際には限られる。そこで、希望する学生が参加でき、かつ大学外部から大学に知識や経験を提供してもらう機会として企画した試みが、経済学科の経済学特殊講義Ⅰ～Ⅳである。

このうち九月から始まる経済学特殊講義Ⅱでは「地域産業政策講座」と銘打って、宮城県庁で産業振興に携わっている方々による講義を予定している。その中で、県の産業政策運営を通じて、地域経済の舵取りに取組む姿、苦悩、試行錯誤、予想外の結果などを話してもらえれば、経済学の理論を通じた経済・社会の理解とは異なった社会理解の機会になると思われる。

具体的な講義内容としては、「みやぎのモノづくり」、「おいしいごはんの話と宮城の米戦略」、「農漁家レストランとアグリビジネス振興」、「複眼竜の県土づくり」、「産業経済のグローバル化への適応」など、全部で十五回の講義を毎週土曜日の夕方十六時～十七時三十分に予定している。

なお、九月二十日(土)の第一回目の講義担当者は、総論として、浅野史郎宮城県知事を予定している。

〈経済学部経済学科〉

「町の弁護士」養成に向けて
法科大学院説明会開催

平成十五年七月二十六日と八月二日、二〇〇四（平成十六）年四月スタート予定の法科大学院（法務研究科法実務専攻）に関する説明会が、土樋キャンパス五号館五一一番教室で開催された。出席者は二回併せて約六十人。阿部純二法学研究科長があいさつで、「現在七十大学が名乗りを上げているが東北地方の私学では本学だけである。規模は小さいが内容のあるものにしたい。総合研究棟も建築中で、教授陣も揃っている。今後の進路決定の参考にして欲しい」と話された。続いて、斎藤誠法学部教授により設置の目的・理念、教育内容・方法、教員組織と授業担当、施設・設備、選抜の方法、学費と奨学金などの概要説明がされた。質疑応答では、グループ担任はどのような資格者か、奨学金についてや既習者募集の定員、夜間・週末のみの受講などの質問があった。終わりに、出席教員全員による個別相談も行われた。

第53回東北・北海道地区大学
一般教育研究会を開催

第五十三回東北・北海道地区大学一般教育研究会が九月十一日、十二日の二日間、土樋キャンパスで開催された。

本研究会は東北・北海道地区所在の大学および短期大学で構成され、大学における一般教育に関する研究や資料の交換などを目的に発足し、本学で開催されるのは昭和四十二年第十七回以来二度目。

今回は大テーマに「教養教育再構築―大綱化十年の検証と課題」を掲げ、平成三年の大綱化から十年を経た今日、現代社会に求められる教養教育の再構築について、あらためて、各大学で行われてきた改善の取り組みを、事例などを含めて検証し、再構築に向けた視点や方向性を探る試みがなされた。

初日は、本学の倉松功学長による委員長あいさつに続き、全体会「東北大学における全学教育改革の歩みと課題」と題した講演（**写真**）が、東北大学総長補佐・大学教育研究センター長の坂本尚夫氏により行われた。続いて「教養教育の組織と制度の現状と課題」「教育内容・方法の改善に向けた新たな取り組み―特色ある教養教育の開発」「地域と連携した教養教育―特色ある教養教育の開発」の三つのテーマごとの分科会に分かれ、この改善の取り組み事例をもとに議論を深めた。各大学の個性に合わせ、特色ある教養教育の開発を目指し、各大学で試みられた改善の事例をもとに、開発の視点や方法が模索され、大学教育を充実・発展させる上で不可欠となっている地域との連携協力についても活発な議論が交わされた。

二日目には前日の分科会の報告に加え、大学間連携が取り上げられ、地域内連携と広域連携の二つの事例をもとに、連携を促す仕組みや教養教育における効果と問題点などについてさらに検討が加えられた。

大学二部定期戦
対北海・青山戦で勝利

第二十二回対北海学園大学二部総合定期戦が、八月二日に東北学院大学の主管で泉キャンパスにて開催された。

開会式では、開会宣言・優勝杯返還に続いて各大学関係者のあいさつの後、ペナント交換・選手宣誓が行われ、第二十周年を記念したプレート設置の除幕式が体育館前にて挙行された（**写真**）。競技はバスケットボール、バレーボール、卓球、バドミントン、テニスの種目で総合優勝が競われ、バトミントンで惜敗するも他種目が接戦を制して四勝を上げ、本学の四勝一敗で本学が総合優勝した。

一方、八月九日には第二十六回対青山学院大学二部交流定期戦が青山学院大学の主管で開かれた。競技はバスケットボール、バレーボール（男）、卓球、バドミントン、居合道で総合優勝が競われ、バスケットボール（男）と居合道で敗れるも、他種目で勝利し、通算四勝二敗で本学が総合優勝した。

なお、両校との二部定期戦で総合優勝を飾ったことにより、平成十五年度の各総合定期戦は、すべて本学が総合優勝を果たした。